－解説板を探して見学する中瀬鉱山町－

中瀬鉱山

安土･桃山時代、江戸時代には金山として、昭和には金･銀･アンチモン鉱山として栄えた中瀬鉱山。全盛期の面影を今に残す町並みを散策してみましょう。

宝引山麓の高台に残る「陣屋（金山役所）跡」の古い石垣、金昌寺・金光寺・宝泉寺など、金山ならではの寺号を持つ古い寺々、昔のままに残る水路。陣屋跡裏の“御林”に上がれば、眼下に“総構え”の旧「中瀬金山町」と、今も稼働中の製錬所が一望できます。

鉱山町の中にある解説板をまとめました。解説板を探して中瀬の鉱山町を見学して下さい。

⑪中瀬鉱山

昭和 20 年代中期の中瀬鉱山（日本精鉱株式会社中瀬製錬所）の全景です。上部には坑道「白岩間歩」があり、坑内は石間歩坑・大切坑へと分岐します。鉱床は東西約 1km、南北約 1.3km の狭いエリアに集中していました。坑道の総延長は約 33.3km に及び、写真の場所から約 500 m西にある石間歩坑口（海抜約 250 m）を基準として、地下 270 mまで掘り下げました。このため坑道の最下点は、海抜下 20 mになります。

記録に残る昭和 13 年から昭和 44 年までの採鉱出量は、計約 1,111,963 トン（8トントラック約３万９千台）になります。その内、金は約 7.3 トン、銀は約 38.9 トン、アンチモンは約 6,041 トンでした。金の平均品位は、1 トンあたり 6.5g です。また、金約 7.3 トンの内、特上鉱である自然金は 764kg でした。坑内人員は昭和 26 年に 175 人で最多となっています。

中央に上から下へ通路のようなものが見えますが、これがインクライン（物資を運搬するケーブルカーの線路）です。この中腹左側にシックナーがあります。また、インクラインの少し上方に「白岩間歩」があります。

シックナー
液体中に混じる固体粒子を分離・沈殿させる装置

②八木口番所

慶長５年（1600年）から享保８年（1723年）まで番所がありました。今も字名を〝門口〟といいます。中瀬金山町に出入りできる者は、吉井まで北側の山裾を通り、ここで２度直角に曲がって中瀬金山町に入りました。いわゆる〝クランク〟状に曲がる道路は現在も認められます。通行手形のない旅人が西方向の因幡方面に向かうためには、八木口門から金山町に入れなかったため、吉井村円光寺付近から山腹に入り、中瀬金山町の御林北側から大日寺付近を経て現県道の少し北側を通り、足坂村中を通過したと考えられます。

八木口門の曲がり角付近に刑場があったと言われ、今も〝首塚〟と呼ばれる墓石が三つ残されています。

⑮中ノ萱社宅跡

今は広い空き地となっているこの場所に、かつては社宅（長屋）、中ノ萱クラブ（従業員等の憩いの場）、独身寮、売店を主とした中瀬消費組合、共同浴場などがありました。

売店、共同浴場は従業員やその家族だけではなく、一般住民も利用できました。

今も地名として「中ノ萱」が残っています。これは安土桃山時代末期に「中ノ萱間歩」を開いた賀陽（かや）一族に由来するものです。

空き地隅にある〝荒神さん〟は、今も毎年会社でお祀りしています。

⑨足坂口番所

西の入り口にあったのが「足坂口門」です。また「因幡口門」とも呼ばれました。場所は、大日寺への参道登り口と鉱山へ渡る上白岩橋の付近と思われますが、正確な位置は不明です。慶長５年（1600年）生野奉行の差配で設置され、役人が常駐して旅人の出入りや金鉱石の持ち出しなどを監視するかたわら、商人からは口入金（物品税）を取り立てていました。金山が衰退する享保８年（1723年）まで置かれていました。

番所が設置された当時、通行手形のない旅人が東に向かうためには、足坂村中から現県道の少し北側に入り、大日寺付近を経て中瀬金山町の御林北側の山腹を通り、吉井村の円光寺付近を通過したと考えられています。

⑭尾谷社宅跡・米蔵跡

八木川の南側に位置するこの場所には戦後、谷沿いに階段状の社宅（長屋）が建ち並び、共同浴場もありました。

尾谷を経て大屋へ越える坂道は、近年まで〝庄次郎坂〟と呼びました。文禄２年（1593年）、賀陽（かや）与三右衛門が弟・庄次郎らと共に大阪から来て、中ノ萱間歩を開きました。盛山の頃は両側に人家が密集し、麓には間口９間（長さ約18ｍ）の米蔵が５棟も建っていたと伝えられています。

⑬大屋口番所

中瀬金山町には八木口・大屋口・足坂口の３ヶ所に番所がありました。

大屋からの峠（梅乃之木峠）を越えて〝尾谷〟を下り、八木川を渡ったところに金山町南口の番所がありました。中ノ萱橋の北側にあたり、ここを〝大屋口〟あるいは〝播磨口〟と言いました。昔は中瀬から大屋谷を経て、播磨へ通う道であったからでしょう。

番所の跡地付近にお地蔵さんが祀られていますが、洪水で付近の田地は流れても、このお地蔵さんは不思議に流されたことがないと言われています。　昭和20年代に入ると、中ノ萱橋の南側坂道沿いに尾谷社宅が建設されました。

③稲荷祠・たいの岩

中瀬と吉井の村境に〝たいの岩〟と称される大岩があり、その岩上に稲荷が祀られています。由来や縁起は不明ですが、昔から吉井と中瀬の住民が参詣してきました。今は中瀬区が初午に祀っています。祠前にある狐像の台座には明治42年〝鉱山志〟として寄進者の名が刻まれ、鉱夫の信仰も篤かったことがわかります。

稲荷祠の裏手から尾根伝いに１kmほど登ると、山腹の平坦地に着きます。この辺りは「城山」とか「代官山」と呼ばれていたところで、代官所が支配する直轄の松林（御林）があったと言われています。

⑦三柱神社

江戸時代は山神社と呼ばれ、通称は山ノ神でしたが、明治６年に三柱神社となり、村社となりました。現在は境内に摂社として山神社があります。境内脇を流れる谷川は、大正時代までは山神谷川と呼ばれていましたが、現在は中瀬川となっています。境内には山神社、愛宕山、稲荷社が併祀されています。

拝殿（昭和６年築）には当地方で有名な丹波出身の彫刻師、第９代中井権次の彫刻があります。秋祭りは 10 月の第１日曜日に行われ、子どもらによる〝練り込み〟が奉納されます。なお、山神社は他に足坂地区西側と石間歩坑口の南側にもあり、鉱山の神様として崇められてきました。

⑧長久山　宝泉寺

本尊：久遠実成釈迦牟尼如来

創建は文禄２年（1593）であり、金山発見後間もない豊臣秀吉時代の創建です。

境内の妙見堂に安置されている妙見菩薩は北斗七星を神格化したものであり、暗闇の地中で働く鉱夫たちの信仰を集めました。境内には鬼子母神が祀られ、毎年６月に祭礼があります。

道路に面した参道の入り口には、南無妙法蓮華経法界の文字を彫った宝暦 11 年（1761 年）の供養塔があります。

境内にも貞享４年（1687 年）の供養塔があります。

⑫宝渓山　金光寺

本尊：阿弥陀如来立像

寛永３年（1626 年）、当主の法主・准如上人が自ら中瀬の道場を本山直末としました。これより前、准如上人は徳川幕府初代の生野奉行。間宮直元に対して、中瀬金山にある当道場を宜しく頼む旨の書状を送っています。享保３年（1719 年）、本山により改めて寺号“金光寺”とし、本尊を受けました。

お寺の東側に隣接して鉱山の社宅が並んでいます。鉱山労働者の葬儀は金光寺で営まれてきました。現在も毎年、慰霊の法要が行われています。

⑥正法山　金昌寺

本尊：釈迦如来坐像

中瀬金山町を見下ろす高台にある風格ある寺院です。約 300 年前の大火で記録が消失し、詳細は不明です。生野代官が中興に尽力しました。

創建は慶長 14 年（1609）です。本堂の裏に土砂で埋没した池があります。滝石組が残る元禄時代に作られた庭園跡です。

明治初期から明治 13 年まで、本堂を利用して尾崎村・関宮村・吉井村・出合村が中瀬小学校を開校しました。

また境内裏の墓地には福井市にある笏谷石で作った宝篋印塔があります。

⑩高瀬山　大日寺

本尊：大日如来像

但馬を遍歴した行基が天平 13 年（741 年）に創建したとも伝えられ、本尊はその時に春弘法師が大日如来像を彫ったものと伝わっています。中瀬では最古の寺院で参道の石畳が歴史を感じさせます。

創建当初は、北側に続く谷の上方にあったと言われています。現在の本堂は妻入り瓦葺で、寛政 10 年（1798 年）の建築です。

境内の小堂には、蛇紋岩で彫った牛の石像が奉られています。昔から大日如来は牛の守り本尊といわれ、牛馬飼育者の信仰が厚く、毎年３月末の〝大日祭り〟は、但馬三大祭りというほど賑わいました。

④信行山　常運寺

本尊：阿弥陀如来立像

太田垣軍慶（吉井・白岩家の祖）の子で、京都嵯峨二尊院で剃髪した直道比丘が寛永元年（1624）に創建しました。

東側に沢岸寺がありましたが、現在は常運寺に併祀しています。

境内の観音堂は無量院と呼ばれており、東向観音と呼ばれる十一面観音菩薩像が祀られています。観音菩薩像は東にある吉井・白岩家の方角を向いていると言われています。

ー解説板を探して見学する中瀬鉱山町ー

①トロッコ

中瀬鉱山の白岩坑で使われていたバッテリーロコ（蓄電池機関車）とトロッコです。長年屋外に置かれていたため錆と破損が進んでいます。

バッテリーロコは、昭和３年に日本輸送機株式会社がはじめて国産開発しました。

当時、各地の鉱山や炭鉱では資源需要の増加に伴い、搬出手段の向上が課題でしたが、坑内の空気を清浄に保つため、ディーゼルエンジン等は使えませんでした。そこで開発されたのが蓄電池式の機関車で、大いに威力を発揮しました。

中瀬鉱山でも昭和 10 年代に入ると有望な金鉱脈が次々に発見されましたが、搬出手段が課題となり、昭和 15 年 11 月に初めて導入されたものです。戦後２両が追加され主に鉱石を搬出するトロッコを牽引しましたが、１両は坑内夫の入出坑のために、小さな人車３台（１台当たり８人乗車）の牽引にも利用されました。

⑤陣屋（金山役所）跡

天正 10 年（1582 年）、豊臣秀吉配下の生野奉行伊藤石見守は中瀬に金山屋敷や間歩屋敷を建て、吉井村高の 168 石を分離して直轄地とし〝中瀬金山町〟を置きました。さらに慶長５年（1600 年）には徳川家康配下の生野奉行間宮直元がここに役所、役宅、米蔵、牢屋を建て、町の東西南に番所を設けて〝総構え〟の金山町を整備します。

金山役所には生野奉行配下の下奉行（上代と呼ばれた）３名が派遣され、羽山庄、須田庄、八木庄などの４千石の支配を任され、金山開発の資金としました。この金山役所は〝金山陣屋〟とも呼ぶべきものです。金山の衰退で享保８年（1723 年）に廃止されるまで百年以上、金山町と近郷の村々を支配しました。

今は田畑として利用されていますが、周囲の古い石垣が〝陣屋〟跡であることを物語っています。

播但貫く、銀の馬車道　鉱石の道
－資源大国日本の記憶をたどる73kmの轍－

中瀬は『播但貫く、銀の馬車道　鉱石の道』の中の「中瀬鉱山関連遺構・中瀬鉱山町」という名称の日本遺産です。兵庫県中央部の播但地域。そこに姫路の飾磨港から生野鉱山へと南北一直線に貫く道があります。“銀の馬車道”です。さらに神子畑鉱山、明延鉱山、中瀬鉱山へと“鉱石の道”が続きます。わが国屈指の鉱山群をめざす道。と解説しています。